

令和元年度第2回札幌市総合教育会議

- 1 日 時 令和2年2月14日（月）15時～
- 2 場 所 札幌ガーデンホテル 2階「孔雀」（中央区北1条西6丁目）
- 3 出席者 札幌市長 秋元 克広  
副市長 町田 隆敏  
教育長 長谷川 雅英  
教育委員 阿部 夕子（教育長職務代理者）  
佐藤 淳  
石井 知子  
道尻 豊
- 4 事務局 教育委員会 教育次長 檜田 英樹  
生涯学習部長 鈴木 和弥  
学校施設担当部長 永本 宏  
学校教育部長 相沢 克明  
教育推進・労務担当部長 早川 修司  
児童生徒担当部長 長谷川 正人  
教職員担当部長 紺野 宏子  
総務課長 宮地 宏明  
教育政策担当課長 高橋 俊範  
庶務係長 松平 健次  
教育政策担当係長 吉田 亜希子  
教育政策担当係長 小林 明弘  
庶務係 後藤 詩緒里  
教育政策担当係 白土 瑞樹
- 5 傍聴者 79名

## 6 講演会

(1) 講師 阿部 雅司氏

(スキー・ノルディック複合 リレハンメルオリンピック金メダリスト、名寄市特別参与スポーツ振興アドバイザー、札幌オリンピックミュージアム名誉館長)

(2) 内容 金メダルへの道のり～人との出会いに感謝～

## 7 議題

子どもの「健やかな体」の育成やオリンピック・パラリンピック教育等の取組について

○鈴木生涯学習部長 皆様、本日はお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。ただいまから令和元年度第2回札幌市総合教育会議を開会いたします。

私は進行を務めます、札幌市教育委員会生涯学習部長の鈴木でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日は始めに、スキー・ノルディック複合、リレハンメルオリンピック金メダリスト阿部雅司様より、「金メダルへの道のり～人との出会いに感謝～」と題しまして、ご講演をいただきます。

講演の後は、阿部雅司様、秋元市長、町田副市長、教育長並びに教育委員の皆様により、「子どもの『健やかな体』の育成や、オリンピック・パラリンピック教育等の取組について」を議題といたしまして、ディスカッションを行うこととしております。

それでは、講演会の開始に先立ちまして、講師のご紹介をさせていただきます。

阿部雅司様は、1965年8月13日生まれ、北海道留萌郡小平町のご出身で、東海大学第四高等学校をご卒業されております。

中学から始めましたノルディック複合競技で3度のオリンピックにご出場され、リレハンメルオリンピックでは、複合団体で金メダルを獲得されております。

また、引退後は、冬季スポーツの普及・指導者の育成など、北海道・札幌のスポーツを支えていただいております。本市の関係では、札幌オリンピックミュージアム名誉館長にご就任いただき、施設を利用したオリパラ教育なども行っていただいております。

簡単ではございますが、ご経歴の一部をご紹介します。

それでは、講演会を開始したいと思いますので、阿部雅司様、よろしく願いいたします。

## ○阿部 雅司氏による講演会

○鈴木生涯学習部長 阿部雅司様、ありがとうございました。

それでは貴重なご講演をいただきました上に、金メダルまでもお見せいただきました阿部雅司様に改めて、皆様から拍手をお願いいたします。

それではディスカッションに移りたいと思いますが、準備もありますので、ここで5分間ほど休憩時間をいただきまして、4時10分からスタートさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

お待たせいたしました。準備が整いましたので、阿部雅司様、秋元市長、町田副市長、教育長並びに教育委員の皆様方によるディスカッションに移りたいと思います。

なお、登壇を予定しておりました中野教育委員ですが、急遽所用により欠席となりましたので、ご了承ください。

議題は、「子どもの『健やかな体』の育成やオリンピック・パラリンピック教育等の取組について」でございます。

以降の進行につきましては、秋元市長にお願いしたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

○秋元市長 札幌市長の秋元でございます。本日はお忙しい中、お集まりをいただきましてありがとうございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

札幌市の総合教育会議ということで、いつもはコの字、ロの字などの形で会議をして、それを傍聴される方もいらっしゃるという状況でやっておりますけども、今日のようにこういうひな壇に上がって会議というのも初めてであります。

今日は阿部雅司さんにご講演をいただきまして、阿部さんの今まで取り組んでこられた事柄を、いろいろなご苦勞もありながら、また、オリンピックでの金メダルを獲得という素晴らしい業績、仕事を残されていたその陰にいろいろなご苦勞があったんだなということをまた改めて感じたところでありまして、今日のこの総合教育会議の議題は、子どもの「健やかな体」の育成、そしてオリンピック・パラリンピック教育等の取組ということでございました。

阿部さんにご講演いただいた内容も踏まえて、意見交換をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

子どもの「健やかな体」の育成については、現在、札幌市では、「『健やかな体』育成プラン」というものを策定して、これに基づいて、各学校における体育・健康に関する指導、学校と家庭・地域が連携した食育などに取り組んでいるところであります。

また、教育委員会以外の全庁的な取組としても、まもなく超高齢社会を目の前にしているということでもありますので、「健康寿命の延伸」ということを最大の目的として全庁あげてのプロジェクトを行っているところであります。

そういう意味では大人を対象とした健康づくりの取組を進めるということだけではなくて、子どもの頃から運動習慣を身に着けていくということが非常に重要だと考えております。

また、オリンピック・パラリンピック教育の取組につきましては、今年の7月、ご案内のとおりであります。また、「東京2020 オリンピック・パラリンピック競技大会」のうち、サッカーの一次リーグ、そしてマラソン、競歩の競技が札幌で開催をされます。

そういう意味で、子どもたちにトップアスリートの人たちの活躍というのを目の前で見ることができました。そういう意味では非常に良い機会と捉えて、これを単にオリンピックがあつてよかったねということではなくて、日頃の子どものスポーツ、あるいは運動習慣へのつながりということに続けていければなと思っております。

それでは、意見交換を始めたいと思っておりますけれども、最初に教育委員会として今取り組んでいる事柄、現状の課題、取組状況について教育長からお話をお願いしたいと思っております。

○長谷川教育長 教育長の長谷川でございます。いつもお世話になっております。それではまず体力からお話をさせていただきたいと思っておりますけれども、お手元にA3版の「さっぽろっ子『健やかな体』の育成プラン」というカラー刷りのものがある方についてはご覧いただければと思います。

そこにもございますとおり、体力は生涯にわたる健康維持、そして気力を充実し、知性を高めていく基礎となるもの、そしてこれからの変化の激しい社会を生き抜いていくために極めて重要と考えてございます。体力なしでは本当に何もできないということでございます。

そんななか、昨年の暮れになりますけれども、スポーツ庁から「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」、これが公表されました。その中では、ソフトボール投げ、20メートルのシャトルラン、握力や持久走など、そういったいろいろな種目の成績を点数化して体力合計点というものを示しております。これが全国的に見ても大幅に低下してきているということでございます。

特に小学校の5年生男子、この体力の調査自体は2008年にスタートしておりますけれども、調査開始以来、過去最低ということでございます。

また、中学校2年の男子も過去5年のなかで最低となっております。さらに札幌の場合はこの全国平均よりも下回っているという状況でございます、非常に憂慮すべき状況でございます。

今、ご覧になっている育成プランにも、これは昨年のものでございますけれども、現状のところいくつか数値が出ているかと思えます。

スポーツ庁では、こういったなぜ低下してきているのかという背景には授業以外の運動する時間が減ってきている、スマートフォンなどの使用時間、いわゆるスクリーンタイムというふうに言われておりますけれども、これの増加、そして肥満の子どもが増加しているといったことが背景として考えているようでございます。

こういった状況を受けまして、札幌市の教育委員会といたしましては、次年度の「さっぽろっ子『健やかな体』の育成プラン」におきまして、各学校において子どもの状況を踏まえ、課題を明確化して体育・健康両面のバランスの取れた指導、これをこれからも一層充実していくというふうに考えてございます。

具体的な取組といたしましては、これまで小学校において行ってきた縄跳び運動でございますけれども、これが東京オリンピック・パラリンピック推進本部から「beyond2020マイベストプログラム」というところで認証されたということでございます。これは7月24日が開会式でございますけれども、それに向けて、市内全ての小学生がそれぞれの目標を立てまして、縄跳び運動に取り組んでいるところ、今まさにやっているところでございます。

それに加えまして今、北海道教育大学と連携いたしまして、子どもたちの状況について分析をしております。これを分析した上で、子どもの体力運動能力の向上を図るということにしておりますけれども、例えば、運動習慣の形成を目的としたイベント、そういったものの企画、そして楽しく継続的に持久力や敏しょう性、先ほどノルディックの複合でも瞬発力、持久力との話がありましたけれども、そういった持久力、敏しょう性を高めることができるオリジナル、札幌版の体操を今考えているところでございます。

いろいろと新たな方策を検討しているところでございますけれども、いずれにしても体力、運動能力向上のために家庭と連携いたしまして、運動習慣の定着化、これを図っていきたいというふうに考えてございます。

オリパラ教育についてでございますけれども、オリンピック・パラリンピック教育につきましても、スポーツの価値を再認識し、国際的な視野をもって世界の平和に貢献できる、そういった人材を育成したいということで行っているところでございます。

この教育につきましても、その精神や歴史、大会に関する知識、選手の体験エピソードなど、オリパラそのものについての学びということと、スポーツの価値や参加国の文化、共生社会などのオリパラを通じた学びの2つで構成をしているところでございます。

先ほど阿部さんからもお話がありました、本当に素晴らしいお話でございました。こういった阿部さんの体験談も、実は中学校の特別な教科、道徳、これにおいて強い意志、生きる喜び、これを主題とした授業展開例として教材にまとめているところでございます。

今年度はオリンピック、パラリンピックの指導者等を学校に招いて講演会を行ったり、実際に体を動かす体験活動をしたり、オリンピックミュージアムに行っているいろいろな活用方法を学ぶといったこともしてございます。

今年の7月は、先ほど市長からもお話がございましたように、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会、このうち、サッカー、マラソン、競歩は札幌市で開催されるということでございます。今から子どもたちも大変楽しみしているところでございますので、これからもスポーツ局等と連携をして取り組んでまいりたいと思っております。私からは以上でございます。

**○秋元市長** はい、ありがとうございます。今の教育長からの報告のなかで、全国的にも子どもの体力・運動能力が落ちているという状況のなかで、さらに札幌の子どもで見ると全国平均よりも低いという状況がありまして、それを何とか楽しみながら体を動かすというような工夫をしようということで報告がありました。

先ほどお話をいただいて、阿部さん。小さい頃からずっと運動されてきて、オリンピック目指してこられて、今の教育長のお話を聞いてどんな感じを持たれましたか。

**○阿部氏** はい、そうですね。僕は田舎だったので、本当にいろいろなことをしたんですよ。そして本格的にやりだしたのは高校生からなんですけども、やっぱり子どものう

ち、特に小学校の10歳前後、ゴールデンエイジというんですけども、そのころに覚えた運動というのは一生覚えているんです。

逆に言うと、そのころに運動しなかったら運動音痴になっちゃうという大事な時期があるので、そのころに例えば、陸上に入ったら陸上だけしかやらない子とか、今少年団に入ると、そのスポーツしかやらない子が結構多いんですよ。本当は小学校の時にあまり結果を求めるんじゃなくて、いろいろな運動を経験させて、本格的にやるのはもう少し先でもいいんじゃないかなと僕は思っています。

それで、今年の4月から札幌市のほうでも「DO! スポKIDS」という事業が始まります。これは札幌市を5つのエリアに分けて、1つのエリアで30人ずつ募集をするんですけども、その募集した子どもたちをAのエリアでは毎週月曜日にいろいろな運動、同じ運動ではなくて今日は野球、今日はサッカー、今日は陸上をやります、という感じで、それには日ハム、レバンガやエスポラーダも手伝ってくれたりする 때가 あつたり だとか、冬になったら僕が歩くスキーだとか教えたり、というのを1年間継続して、子どもたちにいろいろな体験してもらおうという事業が始まります。

それを僕が監修することになったんですけども、そうすることによって子どもたち、例えば野球をやっていたらレギュラーにはなれないけども、走らせたらずごい速い、陸上をやったらもしかしたら結果が出るんじゃないか、子どもたちってやっぱりそういう可能性がたくさんあるんですけども、今の状況だと親が野球をやっていたら子どもも野球とか、そういう感じで子どもにそういうチャンスってなかなかないので、チャンスを与える場になれるようなのを、4月から札幌スポーツ協会というのが立ち上がるので、その目玉事業としてやります。

そこでいろいろな才能のある子どもを見つけたら、今度はそれを育成していく事業がありまして、2030年には札幌出身のオリンピック選手を出したいということで、まずは発掘しなければその結果を求められないので、4月からその事業で何とか子どもたちにいろいろなスポーツを経験させたいなと思っています。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。先ほど阿部さんの講演のなかでもスポーツ人口ということで、大体札幌でも全国的にもそうですけども、野球をやる子、サッカーをやる子というのは結構多いけど、それ以外のスポーツだとなかなかやる子がいないとか、機会がないだとか、そんな形があるのかなというふうに思いますけど。



○阿部氏 あと、今の補足で、先ほどメダルの数の話をしたんですけども、2018年の平昌オリンピックで一番メダルを取った国を知っていますか。日本は13個を取ってすごく盛り上がったんですけども、実は世界一メダルを取っているのはノルウェーなんです。39個。人口は北海道と同じくらいで500万人くらいしかいないのに39個で、ドイツやアメリカの国よりメダルが多い。

その国の特徴はクロスカントリーが一番メダルが多いんですけども、クロスカントリーの指導方法がすごくしっかりしていて、例えば、小学校ではクロスカントリーをやるなら週2回しかやっちゃいけない。それも1時間しかやっちゃいけない。中学校になったら80分を2回やってもいいですよ、それ以外は他のスポーツをしてください、というちゃんと国から指導教本みたいなのが渡っていて、各指導者はそれを守ってやっているんです。

だから変な話、高校生くらいになるまでは、サッカーやったり、いろいろなことをやっていて、結局はサッカーのプロになったりする子もいるし、でも、クロスカントリーだけをやっていないので、小・中学校のときには日本の選手の方が断然強いんですよ、ノルウェーの選手より。でも高校になって本格的にクロスカントリーを始めたら、そっちの方が強くなってしまって、世界へ行くとクロスカントリーが強いのはノルウェーという感じにもうなっているんですよ。

それくらいノルウェーははっきりと子どものときに1つの競技だけをやらせないようにしているということがあるので、それを日本でもやりたいというのがあります。

ただ、1点だけ間違わないでほしいのが、子どものときからやっていないとだめな競技もあるんです。例えば、器械体操だとか、卓球とかバドミントンもそうですね。ああいうのは小さい頃からやっていないと、大人になってからいきなりやりだしても、なかなかだめな競技というのがあって、逆にいうと、そういう競技はノルウェーは全くだめで弱いんですよ。そういう特化しているスポーツもあるんですけども、本当に子どものときにいろいろな競技をさせるというのは、子どもの可能性をかなり引き延ばすと思います。

○秋元市長 ありがとうございます。このあとは各委員の皆さんともフリーディスカッションでいきたいなというふうに思います。先ほどの運動能力の調査の関係だとか、今の阿部さんのお話も伺って、これからの子どもたちの健やかな体ということについて議

論していきたいと思います。それでは特に当てませんので、手を挙げていただいと  
います。よろしくお願いいたします。はい、阿部委員。

○阿部委員 皆さんこんにちは。教育委員の阿部と申します。どうぞよろしくお願  
いいたします。

私、今日、阿部さんのお話を初めて拝聴いたしまして、すごく驚いたことがありまし  
た。先ほどの話で、競技にもよるということだったんですが、阿部さんがジャンプを始  
められたのが小学校3年生から4年生ぐらいということだったので、そのきっかけにな  
っていることが学校の先生の声掛けだったと聞いたときに、やはり子どもの可能性を広  
げる役割って私たち大人だったりだとか、私も子どもが1人おりますので、私たちの親  
の存在というのはすごく大きいなというのをすごくお話を聞いていて感じた次第です。

そういうことを考えますと、子どもの周りにいる私たち親だったりですだとか、学校  
にかかわっている先生たちからの、身近な大人の存在の声掛けや働き掛けというのは、  
すごく重要な役割を担うんだなということと、先ほど阿部さんからもお話がありました  
けど、子どもの可能性を広げるということもきっかけの1つになっていくんだなと思  
うと、私自身はやはりそういう大人であっていきいたいなとすごく今日は感じた次第です。

その1つにやはり私たちが言葉だけで子どもたちに体を、健康を気遣いましょうとい  
うふうに言ってもなかなか説得力がないのかなと思ったときに、先ほど市長からも健康  
寿命の延伸というお話がありましたように、私自身も今は冬という時期もありまして、  
体を動かす機会が少なくなっているんですけども、毎日家でできることとして、少しス  
トレッチをしたり、ヨガをしたりしているんですけど、朝起きたときの体の感覚が全く  
違って、体を動かすことってとても重要ですし、自分自身のなかにフィードバックされ  
るものがあるなっていうふうに感じると、必要性をすごく感じることもあるので、大人  
がそういう背中を子どもたちに見せていくということで、説得力にもつながっていくの  
かなというふうに今日は特に感じました。

それから札幌のオリパラ教育ということにおきましては、リアルの現場を見られる機  
会というのはそうそう人生のなかでもそんなにないなかなと思うと、ぜひ札幌のお子  
さんたちにスポーツを通して感動する気持ちだったりですとか、将来の次世代のオリンピ  
ック選手が、先ほど阿部さんからもお話がありましたように、これをきっかけに候補が  
輩出されたり、発掘につながると札幌のなかでの底上げにつながって、皆さんにとって

の良い骨格になればいいなと感じましたので、そういう機会が札幌で行われることを子どもたちは既に知っていると思うのですけれども、ぜひ現場に足を運んでいただけるように私からも子どもたちに声掛けをしていきたいなと感じた次第です。私からは以上です。ありがとうございました。

○秋元市長 ありがとうございます。今、学校で、まだこれからということもあるかもしれないけども、このオリンピックの年の競技で、学校で観戦しようとかそういった動きはありますか。

○長谷川教育長 サッカー、それからマラソン、競歩ということで、まずサッカーにつきましては、今、学校の希望に応じてなんですけれども、学校連携観戦チケットということで、それを配布すると。なるべく子どもたちが応援しやすい環境のなかで、サッカーの試合を見ていただきたいと思っておりますし、マラソン、競歩につきましても、沿道に十数校、学校がございますので、そういった子どもたちに夏休み期間中ではございますけれども、ぜひ見て応援をしていただきたい。それから各学校によっては、例えばこの国を応援しようとか、そういった国際的な教育も含めて、今いろいろと検討しているところでございます。以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。他の委員の方から。では石井委員。

○石井委員 教育委員の石井でございます。よろしくお願ひいたします。今日はフリーディスカッションということで、阿部さんに質問したいと思っていたんですけれども、質問したい内容としましては、子どもたちが主体的に自ら運動に取り組むようになるためにはどうすればよいのか。私たち大人だったり、家庭でどのような働きかけが良いのかということ、日頃、阿部さんが考えていることなどあれば教えていただきたいなというふうに思っております。

というのも、私、今小学校1年生の女の子がいます、子育てをしているんですけども、実際、子育てをしているお父さんだったりお母さんだったり、保護者の方々というのは、やはり子どもたちに日頃から体を動かして健康な体であってほしいだったり、運動が好きであってほしいなというふうに思って子育てをしていると思うんです。

おそらく運動が好きだったり得意な子というのは、小さいときから体を動かす機会が多い子がほとんどなのかなというふうに思うんですけれども、現代の子どもの体力の低

下の原因の一つとしては、やはり幼少期から体を動かす機会が減っている、遊びを通して体を動かす機会が減っているということが言われています。

実際に私も自分の子どもの頃を振り返ってみると、外で遊ぶことだったり、体を動かして友達と遊ぶ機会というのは今の子どもたち、ちょっと減っているのかなと思います。

実際に公園に行っても外で遊んでいる子どもの数というのも、私が子どもの時よりは少ないですし、あとは遊びの変化というのも出てきているのかなと思います。私が子どものときは学校から帰ってきて、ランドセルを置いて外に遊びに行くというのが1日の楽しみの一つだったんですけども、今は家でできる遊びというのも増えていて、おそらく子どもたちにとっては魅力的な遊びも多いんだと思うんですね。

それもまた体力の低下に拍車をかけているのかなと思ってしまっていて、実際に子育てをしていて、子どもが小さいときは大人が呼びかけることで、子どもも外で一緒に遊んだりだとか、公園に連れていくことができるんですけども、ある程度年齢が上がっていくと、いくらこう親が働きかけても、なかなか外に遊びに行くということはないですし、そうするとますます運動しない子になってそのまま大人になってしまうのかなという一保護者としては懸念がありまして、先ほど阿部委員から、大人がそういう運動している姿勢を見せることで、子どももするのではないかという意見があったんですけども、もし阿部さんが日頃子どもたちに運動を教えているなかで、子どもたちが主体的に運動に取り組むようになるために、何か声掛けだったり、家庭でしてほしいことなどあったら、教えていただきたいなと思いました。

○阿部氏 はい、そうですね。やっぱり今の子どもたちは運動がっちりやる子としない子と、すごい極端に分かれていると思うんです。

やっぱりやらない子を運動させるようにするには、大人であったり周りの人がきっかけを作ってあげないとまず始めないと思うんですね。そして教室だとか、そういう場を作るのは自治体であったり、業界がすることだと思うんですけども、まずはそこに行くのを親なり先生なりが声掛けするのが大事だと思います。

自分はそういう教室をやったりする方なんですけども、まず心がけているのは、初めてやる子どもたちとか、初めていろいろなことをする子には、とにかく遊びから入るといふか、とにかく競技を覚えるというよりは、そのものを楽しんでもらえるような工夫をまずしています。

例えば、歩くスキーなんて結構地味な競技じゃないですか。それを子どもたちに何とか楽しく思ってもらうためにということで、いつも最初にやるのはスキーを履いたらストックも持たないで、そのままみんなで鬼ごっこをしたり、代わり鬼をしたりするんですよ。そうすると、知らないうちにスキーの操作を覚えたり、遅い子も早い子も関係なくスキーに乗るというのも楽しんでくれたり、ちょっと慣れてきたら片足外してサッカーをやってみたりとか、とにかくスキーを黙々やるんじゃなくて、そういう遊びからスキーを好きになってもらいたいというふうにしています。

また、屯田の方で陸上をやっているすごい強いクラブがあって、そこは練習前に 2、30 分くらい鬼ごっこをやるんですけども、選手たちはその鬼ごっこが一番つらいというくらい真剣になってやるんですよ。でも、そのチームって本当に今、各大会で上位を独占するような感じでした、遊びから入って、やっぱり楽しいと思えば子どもたちで続けるんですけども、厳しく指導してもやっぱり楽しくないと思ったら、子どもたちでやっぱりやらなくなっちゃうので、楽しさを覚えてもらうのを意識しているのと、あと、少しできるようになったら褒めるように僕はしていて、褒めて伸ばすタイプです。

○石井委員 ありがとうございます。やっぱり子どもたちにとって遊び、楽しさっていうのがすごい大切なのかなと思って、私も保護者として心がけていこうかなと思いました。きっと、遊びで楽しく体を動かして、そこからまたスポーツに近くなって成功体験なんかがあると、好循環になって子どもたちも段々自主的にというか、主体的に運動していこうという気持ちに成長とともにつながるのかなというふうに思いました。はい、ありがとうございます。

○阿部氏 そう思います。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。先ほど阿部さんの話のなかで、10 歳くらいまでの子どもに運動経験というか、そういうものがある子とない子では全然変わってしまうというのがありましたけど、確かに自分たちが子どもの頃って、先ほど石井委員もおっしゃっていたように、外で遊ぶのが当たり前、僕らの子どもの頃は野球は原っぱでやるみたいな。なかなか今、外でそういう場所もなかなかないですし、道路でキャッチボールなんかしていたら危ないというふうになってしまうので、やる場所もなかなかない。

きっちりやる子たちは例えば、保護者の方が一生懸命でやられているということもあって、そういうきっかけ作りというのが自然に入ってくるということ、意識的に何か作っていかなきゃならない、そういうきっかけを作っていかなきゃならない時代になっているのかなと感じがしますね。

○阿部氏　そうですね。それを考えると、この4月から札幌スポーツ協会で始める「D O ! スポ K I D S」というのは、本当にプログラムを見たらわかりますけど、おもしろいのがいっぱいあって、僕もやってみたいなという種目もたくさんあるんですよね。そのため、子どもたちは多分楽しめると思うし、毎回違う種目をできるので、楽しんで1年間学べる素晴らしい事業じゃないかなって僕もすごい楽しみにしているので、ぜひ注目してみてくださいほしいなと思います。

○秋元市長　はい、ありがとうございます。他の委員の方。

○道尻委員　教育委員の道尻と申します。今までのお話を伺っていて、やはり運動習慣、10歳くらいまで、あるいはもう少し上にしても、せいぜい少年から青年くらいまでのときに、どうやって身に付けてもらうかということが非常に大切だとわかってきたところですが、我々、私も子育てを経験しましたが、勉強習慣というのは一生懸命子どもに植え付けようと考えがあるんですけども、運動習慣ってそれを身に付けさせるという意識というのが、やっぱり必要だということがなかなかそこまで思い至ってなかったかなと今感じているところがありまして。今、大学生の子どもたちを見ても、一人は一生懸命運動していますが、もう一人は全く運動をしないということが表れていて、黙っていてもやる子はやる、まさに先ほど阿部さんがおっしゃっていたような二極化といますか。そういう傾向がうちの家庭にもあるなと身をもって感じていたところです。

やっぱり市としても、学校としてもそうなんですけれども、家庭への働きかけというのがもっとなされていいのかなと。今までは黙っていても外で遊んで基本的な体力が身についていたのが、そういう時代じゃなくなったという話もありましたけども、そういったことを意識的にやっつけていかないとやっぱりこれからはだめで。それこそ健康寿命を延ばしていくという国なり市なり、社会全体の考え方にどうやって近づいていくかという取組が必要なんだろうと思います。

家庭として、そういった理解を得た上で、どういう行動ができるのかということ考えたときにそういう機会が身近になかったり、あるいは経済的にそういう余裕がないと、

なかなか口では言っても実際に家庭の中で実現していく、それも多くの人たちがそうやって運動する機会を得ていくということができなくなるというふうに思うところがあります。

冬場であればまさに歩くスキーとか普通のスキーとかスケートとか、いろいろ考えられるところはあるんですけども、実際そう簡単にできていない、むしろ最近はそのようなことがやや昔に比べて低調になってきているという実態もあるので、その辺りをもう少しやりやすくなってくれば、自分たちも子育てのときにもっとそういう機会を持てたのかな、なんて思っています。

あと、家庭だけの問題でもやはりないんだろう、先ほどから出てきたとおり。今でも、子ども会とか、あるいは地域のスポーツクラブとかいろいろなところと連携をして取り組んでいくといったようなことがありますけども、やっぱり自分の家庭だけではできない人たちをどうサポートしていくのかと、そういうところでどんな子どもたちにもそういう機会が広く与えられるような取組をしていかなきゃならないんじゃないかなというふうに感じています。

最後に学校教育の場面でも、授業でいろいろな競技を勉強する、ある意味先ほど阿部さんのおっしゃられた必要なことがなされている面があると思うんですけども、これを一律に求めてしまうということになると、運動があまり得意じゃない子どもにとっては負担になり、それが場合によっては運動嫌いを作ってしまうということにもなり兼ねないと思うんですよね。

ですから、地域での活動もそうなんですけれども、学校教育の場面でもやっぱり、いろいろレクリエーション的なものを取り入れるなどする、そういう競技ではない運動、あるいは単純に体を動かすための遊びも含めたそういった楽しめる工夫をいろいろしていくことがますます大事なんじゃないかなと思いました。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。佐藤委員、いかがですか。

○佐藤委員 教育委員の佐藤でございます。先ほどの教育長のコメントにもありましたように、その札幌市の子どもたちは運動やスポーツを好んでいるにもかかわらず、その体力や運動能力のデータというのは長らく全国平均を下回っているという現状にあります。

理由としては、よく環境要因、冬が長くて運動する機会が乏しいということが挙げられてきたわけですが、札幌市の学校の先生方は屋内でできる、先ほどもでましたけれども、縄跳び運動とか、その朝ダンスですとか、文化系部活に所属する生徒のための運動会を開催するなど、冬場の運動不足を補う方法というのを様々に考案されて、実践されてきたというふうに思うわけですね。その結果として、体力のデータというのは近年上昇傾向にあるわけです。

にもかかわらず、まだ全国平均に届かないのはどうしてなんだろうというふうにも考えているんですけど、例えば、阿部さんは長く札幌市の子どもたちを見てこられたと思うんですけども、率直に言って全国に届かない原因というのはどこら辺にあるとお考えなのかなと。もしよろしければ伺いたかった。今までは、どういうふうに働きかければ伸びていくかというお話だったんですけども、その大本の原因ってどの辺りにあるのかなということを伺いたいのですが。

○阿部氏 そうですね。やっぱり札幌の場合は、魅力というか誘惑が多すぎるのかな。田舎のほうに行くと、本当にスポーツというか体を動かすことしかなかったんですけども、札幌市は都会なので、子どもたちもスポーツをしなくても楽しめることがたくさんあるんで、そっちの方に行っちゃっているのかなって気がしますがね。

○佐藤委員 すみません急に。ありがとうございます。

今回、先ほど教育長からもご紹介がありましたように、北海道教育大学の専門の先生方とこの現状分析、共同研究を始めるとのことなので、私も多いに期待しております。これまで見えてこなかった要因というのを、ぜひ浮かびあがらせていただきたいというふうに願っております。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。これまでの議論のなかで、町田副市長、どんな感想をもっておられますか。

○町田副市長 先ほど阿部さんからゴールデンエイジの話、小学4年生、10歳の頃というお話を承りました。これなるほどなと思ったんですけど、私、札幌で副市長をしていますが、ここのところ冬のスキーというのは全然やったことがなくてですね。10年ぐらい前まではスキーを一生懸命やっていたんですけど、やらなくなって久しいので、冬のオリンピックの招致をするにはこれはいけないということで、同じような十数年や



っていないという同僚2人を連れて、一緒になってスキーをこの前の休日に行ったんですね。

そうしたところ、10年くらいやっていないというみんな同じような環境にいたんですけど、あとの2人はすいすい滑るんですけど、私、30歳過ぎくらいからスキーを一生懸命始めて、やるときには年間30日くらい、一番ピークのときはそれこそアンヌプリの頂上までスキーを担いで登って滑り降りるくらいのところまでいったんですけど、全然滑れないんですよ。

これは何でかと、今どうしてかなと思ったんですけど、私はそのゴールデンエイジの頃には全然スキーをやっていなくて、なるほどなど。

やっぱり子どもたちには小学校ぐらいのときから、せつかく札幌の環境にいるんだから、スキーというのいろいろな形で1回体験しておくということが必要で、そのとき、先ほど小さい頃に1度でも経験をやっていれば体が覚えている、自転車には1回乗れるようになるとずっと乗れるようになるんですけど、スキーは違いました。1回滑れるようになって、10年ぶりにやると全然滑れなくて、体の節々が、上半身まで痛いという状況であります。

でも、せつかく北海道でスキーを含めていろいろなスポーツに親しめる環境というのは、世界のなかで本当に少ししかないわけでありまして。子どもたちにこういう環境を、スポーツをすることを勧めていくと、先ほど阿部さんの話でもありましたけど、小平町の小平先生がいらっしゃったから、阿部さんはこういう形でスポーツとのかかわりをもって人生をずっとやられている。先生がいなければきっとまた違った人生だったとは思いますが、スポーツというのは例えば、阿部さんの話の最後に、チャレンジするとか、相手の立場に立って考える、目標をきちっと持つ、人との出会いを大切にするとありました。これは別にスポーツだけじゃなくていろいろなことに、例えばブラスバンドに取り組んでいる子どももそうでしょうし、将棋に一生懸命になっている子どももそうだと思いますが、でもスポーツというのはそういったことが非常にわかりやすくやれるものなのかなと思います。

健康寿命を延ばしていくということを札幌市は非常に大きな政策課題としていますが、健康寿命を延ばしていくためには、食事に気を付けるということと、それから運動習慣と社会参加という、この3つが非常に必要だと言われていますが、その運動習慣と

か社会参加という面からいうと、スポーツとつき合う人生というのが非常に健康寿命を延ばしていくのに役立つのではないかなと思っております。

子どもの教育ということに関しては、「DO！スポKIDS」という事業を今年、札幌市で始めるわけですが、子どもにスポーツをする、運動をする習慣というものを本当にいろいろな形で我々が工夫して与えていかなければならないんだなというのを今日は阿部さんの話を聞いて、強く感じたところでございます。ありがとうございます。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。教育長、いかがですか。

○長谷川教育長 今、副市長からもお話があったように、スポーツの持ち越し効果という、若い頃ときにやっていたスポーツの効果というのは、年を取ってもそれが続いていくという。ですから健康寿命を延ばしていくためにも、日頃からのスポーツというのは大事なのかなというふうに思っております。

実は、実はというと市長に失礼かもしれませんが、市長も大変なスポーツマンでして、小学校のときは野球をなさっていたり、中学校はバスケット、高校はテニスの主将をやっているということで非常にスポーツマンでございます。市長のお考えを含めて伺いたい、運動に対するお考えをちょっと伺いたいなと逆に思っております。

○秋元市長 小学校に入る前まで本当に体が弱い子だったのですよ、実は。冬になると風邪をひいたり、幼稚園も半分くらい行けていないくらい体が弱かったですよね。小学校に入るようになってから、ちょうど6歳上の兄がいたものですから、野球が相手になるくらいになってきてということで、兄とキャッチボールを始めたり、野球をするようになって、僕らが子どものころはサッカーより圧倒的に野球をやる機会が多かったので、小学校入ってからや野球を始めて体も丈夫になってきてということになりました。

そういう意味ではスポーツもトップアスリートを目指すというよりは、自分の健康維持、そのあとも中学に行って、先ほどの阿部さんの話じゃないですけど、小学校の先生がバスケット、今だとミニバスとか小学校あるんですけど、僕らの時代はミニバスみたいなのはなかったもので、あまり小学校でバスケットをやる機会というのはなかったんですけど、たまたま担任の先生がバスケット好きでバスケットを教えてくれて、中学に行くときに野球をやろうか、バスケットをやろうか非常に悩みながら、結果的にバスケットをやっていたんですけど、バスケットをやった割には身長が伸びなかったもので、高校に行くときには無理かなということで、別の競技をやっています。

そういう意味ではずっと、勤めてからもそうですけど、健康のために体を動かすというのと、そういう意味では小さい頃に運動やっていた習慣が今でも残っているという、先ほどの10歳までの話があって、なるほどなという感じを持ちました。

自分自身の経験からすると、私も田舎育ちで、すぐそばでいったらスキーとかそんな形のところでしたから、今は子どもたちのいろいろな楽しみ、興味があるなかで、学習習慣だとか、運動習慣というようなことをやりながら、できるだけ習慣づけを大人の方で意識して、家庭なり学校、地域でも作っていかなきゃならないのかなと、こんなことを思って今日の話、やりとりをさせてもらったかなというふうに思います。

○長谷川教育長 ありがとうございます。私、阿部さんにもお伺いしたいんですけども、実は先ほどから言っているように今年7月からオリパラ競技を札幌でもやるということで、実際にオリンピックに参加されて地元のホスピタリティというんでしょうか、おもてなしというんでしょうか。いろいろ盛り上げてはいただいていると思うんですけども、阿部さんが地元の方々からどんなお声掛け、これは本当にもう力強い声援を頂いたとかですね、こんなことをしていただいて嬉しかったとか、そういったお話をぜひ伺いたいと思うんですけども、いかがでしょうか。

○阿部氏 はい、自分は現役では3回オリンピックに参加して、リレハンメルというところは、ノルウェーは国技がスキーというくらい、特にノルディック複合は本当に国の英雄になるくらい、そのところで僕たちが金メダルを取って、普通だと僕たちライバルというか敵なのであまり好まれないんですけど、敵の僕たちにも本当に一生懸命応援してくれるんですね。本当は心のなかじゃノルウェーの選手に勝ってほしいと思っていると思うんですけど、僕たちの活躍も一緒になって喜んでくれている。その市民の皆さんを見て、やっぱりオリンピックっていいなってそのとき本当に思ったんですね。

僕たちの今の環境で言うと、例えば、相撲は今ほとんど外人の方が強いんですけども、あれがもし金髪で相撲を取っていたら、みんな応援しようという気にならないですね。そんな感じでアウェーのなか、僕たち、金髪のなかでいる黒い髪をしたアジア人が表彰台に上がったちゃったらみんなおもしろくないと思うんですよ。

でも、そんななかでも温かく試合の時も応援してくれて、表彰式でも温かく声援をくれたノルウェーというのはすごい好きになりましたし、日本で開催するときも日本の選

手だけを応援するんじゃなくて他の選手たちにも、他の国の声援もぜひしてあげると、札幌がすごくいい国だというのが世界中に発信できるんじゃないかなと思います。

○長谷川教育長 ありがとうございます。

○秋元市長 ありがとうございます。他の委員の方で何かここで発言をということがあれば。

○道尻委員 一言だけ。今お話いただいた阿部さんのところにもつながるんですけども、オリンピックの価値のなかで教育に引き寄せて考えたときに、チームプレイですか、あるいはボランティア精神とか、そういったものを子どもたちに知ってもらう、それも単に話を聞くだけではなくて実際に目でみたり、体験したりすることができる機会として、大変貴重なオリンピックだと思うんですね。

ぜひそれを活かすような教育というのを実現できればいいなと思いますし、そういったことを通して自らもボランティア活動とか、あるいはチームプレイの精神を持った人間になっていただくことにつながっていけば非常にいいんじゃないかなというふうに思いますので、このチャンスをぜひ活かす取組をしていきたいし、お願いしたいと思います。

○秋元市長 ありがとうございます。阿部さん、最後何かございませんか。

○阿部氏 はい、そうですね。やっぱり僕はスポーツで子どもたちに伝えているのは、例えば競技会に出ると100人いたら1位から100位まで順位がつきます。でも1位の人の方が偉いかというと、僕はそうじゃないと子どもたちに言っています。1位の人よりも100位から99位になるために一生懸命頑張った、順位を1つでもあげようとして一生懸命頑張った、その努力した人の方が、僕は何も努力しないで勝った人よりも偉いと思っています。それはいずれ1つずつ上がって行って、1番の子を抜くかもしれないし、スポーツって100人出たら1位って1つしかないんですね。それを取ったから偉いっていうんじゃなくて、今の自分よりも、少しでも1つでもステップアップできるように頑張る、努力することが大事なんだよと子どもに伝えています。

それがスポーツの良さでもあるし、そこで頑張れた、結果がでたら今度勉強でも頑張ってみようとか、そういうのにどんどんつながってくると思うので、やっぱり努力する、そして結果が出るというのが非常に大事だと思うので、決して1番取るためにやっている

んじゃないっていうのを、僕は子どもたちに伝えていきたいなというふうに思っています。

○秋元市長 はい、ありがとうございました。阿部雅司さんには最初にご講演もいただき、また、この会議の議論にもお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

それぞれのお立場から今日もご意見をいただきました。今日のテーマは子どもの「健やかな体」の育成、それからオリンピック・パラリンピック教育等の取組ということについて、中心に議論をしたところであります。

今後、今日のように様々な議論を重ねて、札幌市全体での施策を進めていく、教育行政も進めていきたい、このように思っているところであります。引き続き、皆様方にはご尽力を、またお力添えをいただきたいと思っております。

また、最後に阿部さんには今日、大変お忙しい中お越しいただきまして、本当にありがとうございました。

○鈴木生涯学習部長 皆様、ありがとうございました。以上を持ちましてディスカッションの方は終了させていただきたいと思っております。

本日、ご講演、さらにはディスカッションにも参加いただきました阿部雅司様に改めて、御礼申し上げます。ありがとうございました。

これをもちまして、令和元年度第2回札幌市総合教育会議を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

以 上